

〈研究ノート〉

相対的剥奪論 再訪（五）*

高 坂 健 次**

はじめに

「相対的剥奪」概念は、*The American Soldier* (1949) においてはじめて明示的に導入された概念である。むろん何度も言うように、それに先立ってたとえばトクヴィル (1805-59) の『旧体制と大革命』(1836) などのなかにも同様の考え方やアイデアが示されていたけれども、やはり明示的にコトバとしての「相対的剥奪」(relative deprivation) がはじめて使われたのはスタウファータたちの仕事のなかにおいてであった。

マートンやラザーズフェルドらは、すでに述べたように (高坂, 2011)、プロジェクト全体からすれば正式には「コンサルタント」という役回りであったけれども、実質的には前後の文脈からして「内輪の人間」だった。しかも、マートンとキット (Merton and Kitt, 1950) による「準拠集団行動論」に象徴されるように、相対的剥奪論の発展という視点から振り返れば大きくは「3つの取り逃がした機会」があった。

第1は、「相対的剥奪」の定義がなされなかったこと。第2は、相対的剥奪論にとっては究極の課題と言ってもよい「準拠集団」というそれ自体は観察不可能な理論的アイデアの観察可能な事態との対応関係を見出せずに終わってしまったこと、ひいては相対的剥奪を生成するメカニズムそのものの解明には至らなかったこと。第3は、相対的剥奪に関わるデータとして主に記述データばかりに頼ってしまったことによって、数値に示された相対的剥奪現象のデータを取り逃がしてし

まったこと、である。マートンとキットはこれらの難点を抱え込んだままに終わった。

一方、ケンドールとラザーズフェルド (Kendall and Lazarsfeld, 1950) らの方法論的厳密主義の立場も、相対的剥奪現象の「社会学的に面白い」かたちを指摘する点で正鵠を射ていたにもかかわらず、具体的な分析にまでは歩みだすこともなかった。またマートンとキットによって提示された準拠集団と相対的剥奪の関連を方法的に明らかにするという最後の難問に取り組むまでには至らなかったのである。

The American Soldier についての「外側からの」吟味と本格的な「相対的剥奪論」の発展とは1950年代の終わりになってようやく芽生えてきた。本稿では、その芽生えとして Davis の仕事をまず取り上げたい (Davis, 1959)。「外側からの」とは言ったけれども、デーヴィスの論文を一読すれば分かるように、マートンとキットによる *The American Soldier* からの「9つの抜粋」を忠実に再吟味しようとしており、その点ではむしろマートンとキットの仕事を継承というべきかもしれない。したがって、本稿では、最終的にはマートンとキットが「取り逃がしてしまった3つの機会」をどのように克服しているか、できていないかの観点から述べることにしよう。

デーヴィスの論文はさほど長いものではないけれども、念入りに述べられているところと端折らんがばかりに述べられているところが共存しているように思われる。本稿では、デーヴィスの貢献と限界とが浮き彫りになるよう、かなり思い切って議論の運びを組み替えていることを前もっ

*キーワード：相対的剥奪、『アメリカ軍兵士』、準拠集団、取り逃がした機会

本研究の一部は、科学研究費基礎研究 (B) (課題番号：20330114) の援助を受けてなされたものである。

**関西学院大学社会学部教授

で断っておきたい。

1 デーヴィスの定義

1.1 剥奪と非剥奪

デーヴィスが提案した「相対的剥奪」の定義に向けての議論は次のようなものであった (Davis, 1959)。

まず、人には客観的に見て「剥奪されている」状態と「剥奪されていない」状態とがある。デーヴィスは殊更には断ってはいないけれども、これらの二つの状態は「相互排反的」で「網羅的」である。つまりは、人は「剥奪されている」か「剥奪されていない」かのどちらかである。どちらでもない状態とかどちらでもある状態は、(とりあえずは認識上) ありえないものとする。

このように言えば、種類の異なった資源についてはどうか、という疑問がただちに沸き起こるかもしれない。たとえば、所得という資源については自分は「剥奪されている」けれども、学歴という資源については「剥奪されていない」といった状態をどう考えるか、といった類の問題である。しかし、デーヴィスはこうした資源の多次元性については可能性も指摘し、それへの方法的対応も言及しているが、とりあえずは一次元 (= 一種類) の資源の世界から出発して (そして、終わって) いる。

また、「(客観的に) 剥奪 (されている)」ということの意味については、深くは追究していない。「多くの財産をもっていると、それを失うまいとする心が働いて、むしろ裸一貫の人よりは不自由で、自由闊達に生きる機会を剥奪されている」といったことは現実にはありうるだろうし、個人的にもよく理解できるというか「その通り!」と喝采したい気持ちもあるけれども、そのような「剥奪」の使い方をデーヴィスは認めていない。取り敢えずは、資源の所有・非所有といった、もっとも単純な事柄を指しているようである。そして、そのことについて当該の社会のなかでは何が客観的剥奪かについての「価値」観についての合意が成員の間に存在していると見なしている。

或る集団を想定する。その集団の構成員は、た

とえば (一般的に表して) N 人である。したがって、その N 人のなかの何人かが「剥奪されており、何人かが「剥奪されていない」。仮に、「剥奪されている」人の数を m_1 、「剥奪されていない」人の数を m_2 とすると、ただちに「剥奪されている」人の割合と「剥奪されていない」人の割合とが表現できるだろう。デーヴィスは前者を P で、後者を Q で表している。当然のことながら、 $P+Q=1$ である。

次には人々の間での「比較」をデーヴィスは問題にする。誤解がなければ、「出会い」と言ってもよいかも知れない。自分が「剥奪されている」人間だとすると、自分にとっての「比較」の相手は、この (剥奪されているか否かの二者択一の) 状態に照らしてみるかぎり、「剥奪されている」人間か「剥奪されていない」人間かのいずれかである。自分が「剥奪されていない」人間だとしても、やはり「比較」の相手は同様の二通りしかない。

デーヴィス自身は、このような単純化を詳しく説明しているわけではない。ただし、説明の仕方を簡略にするかどうかということは、話の運びとしての「単純化」とは関係がない。議論を簡略化していてもいなくても、このような話の運びが「単純化」であることには相違ない。こうした「単純化」を目の当たりにして、「面白くない」と思ったり「深みがない」と思うことは自由だけれど、およそフォーマルな概念定義やフォーマル・セオリーにはこうした「単純化」は不可欠である。

マートンとキットは、スタウファーたちの仕事には「フォーマルな定義が欠けている」と指摘した。しかしながらその結果は、自分たちも「フォーマルな定義を下す」という機会を取り逃がしてしまったのである。およそ概念定義には、それが操作的概念であるか否かにかかわらず、明確さが求められるけれども、明確さはいつもの種の「単純化」を伴う。

この種の「単純化」に対して、それによって認識世界が広がると感ずるか、あるいは逆に認識世界が狭まると感ずるかは、紙一重のようではあるけれども大きく研究者の行く手を分かれさせる。おそらくマートンとキットは、後者のように感じ

たのだろうが、それではいつまで経っても「フォーマルな定義」に到達しないことも事実である。

デーヴィスの行っている「単純化」のところを、私が長くまわりくどく説明しているのには二つ理由がある。一つは、デーヴィスが語らずとも議論の背後には多くのあえて語らない（＝語るには及ばない）暗黙のことが山のように存在していることを伝えておきたかったことと、もう一つは、この「研究ノート」は後へ行けば行くほどこうした「単純化」とそれに伴う「フォーマライゼーション（＝数学的表現）」の部分が増えるとともに大きな役割を担うことが目に見えているので、今からその準備をしておきたいと思っているからである。

1.2 相対的剥奪と相対的充足

話を戻そう。「相対的剥奪」とは、デーヴィスの定義によれば、「剥奪されている」人が「剥奪されていない」人と比較するとき（結果として自動的に）生成される状態（resulting state）である。両者が出会ったときに「感ずる」心的状態としてもよかったのかもしれないし、事実デーヴィスは「主観的感情」といった表現もしている箇所もあるけれども、もしそのような表現に依拠して定義すると、「人によって感じ方が違う」という話が入り込んでくるので、感じ方の問題を極力避けたのではないかと思われる。

では、「剥奪されていない」人が「剥奪されている」人と比較するとき生成される状態は何と考えればいいか。デーヴィスは、それを「相対的充足」（relative gratification）と呼んでいる。「相対的充足」ないし「相対的満足」の概念については、マートンとキットにも散見できるけれども、デーヴィスはあらためて「相対的剥奪」概念のいわば双対的概念として位置づけたわけである。したがって、同じ一つの「比較」がいずれの立場から見ると、意義付けるかによって、真逆の状態を含意することになる。「比較する」とは、ここではまったくの互角の相互作用（しかも繰り返しや、出会いの深さなどを考慮しない）を意味している。

では、「剥奪されていない」人が同様に「剥奪

されていない」人と比較するとき、さらには「剥奪されている」人と同様に「剥奪されている」人と比較するとき生成される状態はどうか。デーヴィスによれば、そのときの状態は「相対的剥奪」でも「相対的充足」でもなく、いずれの状態でもない。いわば、それらとは無関係の（＝独立の）状態だとされている。ここまですべてが定義に関わる議論である。

2 モデル構築

デーヴィスは以上の概念定義に基づいて「フォーマル・モデル」の構築に入る。「フォーマル・モデル」と言っても、中身は定義に単純な仮定がつけ加わっただけの、いわば「概念モデル」である。では、その「単純な仮定」とは何か。「人と人との比較は、ランダムに行われる」というのがそれだ。ここで「ランダム」とは、むしろ日常生活で使うような「デタラメ」という意味ではなくて、れっきとした統計数学的用語である。つまり「比較」は確率論的ないし「籤引き」のように恣意や意図や構造的偏りを介在させずに行われるものとする。

3 デリヴェーション

デーヴィスは、モデル構築から論理的に導き出される帰結を本論文ではinference（推論結果）と呼んでいる。ただちに、（初歩的な確率論に基づいて）4つの推論結果が提示されている。

- 3.1 相対的剥奪を経験している人々の割合は、 $P \times Q$ である。
- 3.2 相対的充足を経験している人々の割合は、 $P \times Q$ である。
- 3.3 客観的に剥奪されている人の中で相対的剥奪を経験している人の割合は、 Q である。
- 3.4 客観的に剥奪されていない人の中で相対的充足を経験している人の割合は、 P である。

4 経験的事例データの解釈

マートンとキットのあげた「9つの抜粋」の中から第1エピソードを取り上げて、その解釈を

「フォーマル・モデル」の立場に立って行ってみる。第1のエピソードはデーヴィスが引用しているところによれば、もともと次のようなものであった。

徴兵された既婚兵士に対しては、心理的にもっと重要な要素が働いたに相違ない。すなわち、徴兵委員会は独身者に対してよりは既婚者に対してより「お目こぼし」をする (more liberal) 傾向をもっていったという厳然たる事実があった。この事実があったために、徴兵された既婚兵士にとっては、既婚者という同輩の中に自分よりは相対的に幸運に恵まれた (relatively better breaks) と思える事例を沢山に目の当たりにする結果を招いたのである。..。したがって、既婚者には、平均して、[独身で徴兵された兵士よりは] 不承不承入隊してくる傾向があった。おそらくは「不公平だ」という感覚 (a sense of injustice) をもっていたであろう (Stouffer, 1949: 252)。

幾分マニアックなことになるかもしれないが、マートンとキットの取り上げたエピソードとデーヴィスの取り上げたエピソードは同一だけれど、引用箇所は異なっている。それは同じエピソードでもマートンとキットの「非モデル的議論」(non-model argument) の再現とデーヴィスの目指す「フォーマル・モデル」アプローチの違いが、このようなところにも反映していて面白い。

本題に戻ろう。デーヴィスの推論と解釈はこうである。まず、「徴兵にとられる」=客観的剥奪、である。次に、徴兵された既婚兵士集団と徴兵された独身兵士集団の二つの集団を比較してみる。すると、徴兵委員会の選抜のやり方の結果、事実としてPの大きいのは独身兵士集団の方である。言い換えれば、Qは既婚兵士集団の方が大きい。したがって客観的に剥奪されている人 (=徴兵された人) の中で相対的剥奪を経験している人の中での割合は、Inference 3.3により、既婚兵士集団の方である、と。

以上で、デーヴィスの推論の運びを中心に、もっとも単純なところを述べてみた。概念定義に始まって、仮定を導入することでモデル構築をする、そしてその論理的 (数学的) 帰結を推論結果ないしデリベーションとして述べる、経験的データがそのデリベーションの (=理論的予測の) 通りになっているかどうかをチェックする。これがフォーマル・セオリーの一連の流れである。

相対的剥奪論の理論史の中で、デーヴィスの果たした役割を私は「フォーマル・セオレティック・ターン (フォーマル・セオリーの転回)」と呼んでおきたい。

5 概念の延長—「内集団／外集団」と「公平／社会的距離」—

実はデーヴィス論文は、推論結果の要約に入る以前にすでに「概念の延長」を試みている。マートンとキットも準拠集団行動論の展開の過程で「内集団」と「外集団」の存在を区別していたけれども、デーヴィスもその区別に着目する。

要点はこうだ。「剥奪されている」人が自分を「外集団」における「剥奪されていない」人と「比較」した場合はどうか。マートンとキットはこれも「相対的剥奪」概念で済ませようとしていたかに思われる。あるいは、関心の焦点が「準拠集団行動」の方に移ってしまっていて、その観点からは二つを識別する必要性をそれほど感じなかったということかもしれない。

いずれにせよ、デーヴィスは上の場合を「相対的剥奪」とは呼ばずに「相対的劣位」(relative subordination) と呼んで区別している。そして「剥奪されていない」人が自分の「外集団」の「剥奪されている」人と「比較」するときに生成される状態を「相対的優位」(relative superiority) と呼んでいる。

更に、「内集団」内比較については「不公平感」(a feeling of unfairness) という概念を、「外集団」との比較については「社会的距離」(social distance) という概念を導入している。これは以下に要約する Inference における定義式を見ればその意味するところの理解はむしろ早い。

かくて、Inference の続きが得られる。(Po、

Qo はそれぞれ「外集団」(Out-Group)における客観的に剥奪されている人ならびに客観的に剥奪されていない人の割合を意味している。デーヴィスの記譜法と多少異なることを了解されたい。

- 3.5 不公平感を経験している人々の割合は、 $2(P \times Q)$ である。
- 3.6 相対的劣位を経験している人々の割合は、 $P \times Qo$ である。
- 3.7 相対的優位を経験している人々の割合は、 $Q \times Po$ である。
- 3.8 社会的距離を経験している人々の割合は、 $(P \times Qo) + (Q \times Po)$ である。

これら8つの Inference を基本的推論結果と呼ぶとするならば、後続の議論の中でデーヴィスは更に8つの Inference をいわば派生的推論結果として加えてデリベーションを行っている。要するに、デーヴィスがこの論文の中で行っていることはさまざまな工夫を重ねながらではあるが、マートンとキットによって *The American Soldier* から抜き出された「9つの抜粋」エピソード(に一つのエピソードを付け加えて)を徹頭徹尾、上に例示したような「フォーマル・セオリー」的アプローチのもとで解釈しようとしているのである。

最も大切なことは、彼が「フォーマル・セオレティック・ターン」を果たしたことで、相対的剥奪論は飛躍的な一歩を遂げたのである。すでに「研究ノート」としての紙幅も尽きかけているので、ここでその全貌を紹介する余裕は残念ながらない。しかし、彼のモデルは彼なりの工夫の凝らしたものであったので、その一面を伝えておきたい。

以下のエピソードは、マートンとキットが「第5の抜粋」として取り上げたものである。

「兵士のうち現により多く剥奪されている集団のほうが、それほど剥奪されていない集団に比べてさほど批判的でないように思われるのは何故か。相対的剥奪概念はその理由を見つけ出すのに役立つだろう・・・ほんのわずかな特権の享受でも将校と下士官の間の差が少なければ少ないほど——その最も極端な場合は実際の戦闘の場合だ——下士官は将校に

対して批判的でなくなり、剥奪も仕方のないことだと甘んじて受容するようになる。」(Stouffer, 1949: 181) [デーヴィスが引用しているのは下線部分のみ]

ちなみに、この引用の冒頭の邦訳では「・・・より多くの不満をもっているグループのほうが、それほど不満をもっていないグループに比して、・・・」となっている。デーヴィスだと「客観的剥奪」の違いと言いたいところ(多分、スタウファーらも)を、「不満」という心理的状态を含蓄する訳語をあててしまっている。

デーヴィスは Inference 3.6 を援用しながら次のように推論を進める。まず、このエピソードは下士官からみた将校という「外集団」に対する評価の話である。(スタウファーもマートンらも「相対的剥奪」概念で処理しようとしているが、デーヴィスは「相対的劣位」概念で解釈しようとしている。)「客観的剥奪の絶対差が少ない」とは、両集団の P と Po (この場合、確率概念として再解釈されている)の値の変化に反映される。例えば、実際の戦闘の場合だと、どちらの集団の剥奪もそれだけ高まる。したがって、この事態をデーヴィスは P と Po の両方の値に定数 X を加えてやる ($P+X$, $Po+X$ とする) ことで表現する。Qo は $(1-Po)$ だから、結局、両集団とも剥奪が以前に比べて高まった事態での「相対的劣位」RS は次式で表現できる。

$$RS = (P+X)(Qo-X) = PQo + QoX - PX - X^2$$

この式全体の RS 値は、最後の3つの項(いずれも X が関わっている)に着目して、 $PX+X^2$ が QoX よりも大であるとき小さくなる、つまり $P+X$ が Qo よりも大であるとき小さくなる。ところで、X の値が仮に小さくても仮に P も Po も 0.50 よりも大きな値だとすれば、

$(P+X) - Qo = P+X - (1-Po) = (P+Po) - 1 + X > 0$ となり、常に正となるので、RS は小さくなると結論づけることができる。「第5の抜粋」エピソードはそのことを意味していたのだ、というのがデーヴィスのフォーマル・モデルからする解釈だったのである。

結論

デーヴィスの論文を上にも例示したように丹念に読めば、「9つの抜粋」が新たな意味をもって再現されるのが分かるだろう。後は読者に委ねざるを得ないが、本稿では、デーヴィスの議論—私が「フォーマル・セオレティック・ターン」と呼んだ—とマートンとキットの議論の展開が「全く違う」ことが分かれば差し当たりは十分である。つまり、マートンらは、エピソードの例示から出発して「関連がありそうと思われる概念」の交通整理をしていたり類似のエピソードを系統的に整理しているのであって、「何故、そうなるのか」の説明には至っていないのである。

スタウファーらの仕事はマートンらの議論を経て、デーヴィスの貢献によって大きく理論的成熟に向かったといえることができる。デーヴィスについては、たとえば前稿で言及した CHART IX に盛り込まれた数値をデーヴィス・モデルで解釈しようとするればどれだけのことが言えたか、といった関心も当然起こるところであるがそれはまたの機会にしたい。さらに、デーヴィスの概念議論では客観的状态としては「剥奪されている」か「剥奪されていない」かの2つしかない。当然、どの程度剥奪されているかという問題の本格的な取り組みが期待されたところでもある。しかし、これについては相当後まで待たなければならない。

参考文献

Davis, James A. 1959. 'A Formal Interpretation of the Theory of Relative Deprivation,' *Sociometry*, Vol. 22,

- No. 4 (Dec., 1959) : 280-296.
- Kendall, Patricia L. and Paul F. Lazarsfeld, 1950. 'Problems of Survey Analysis,' in Merton, Robert K. and Paul F. Lazarsfeld (eds.) *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier,"* Pp. 186-196. The Free Press.
- 高坂健次, 2006. 「社会学における理論形成」『社会学評論』51(1) : 25-40.
- 高坂健次, 2009. 「相対的剥奪論 再訪 (一)」『関西学院大学社会学部紀要』108号 : 121-132.
- 高坂健次, 2010a. 「相対的剥奪論 再訪 (二)」『関西学院大学社会学部紀要』109号 : 137-147.
- 高坂健次, 2010b. 「相対的剥奪論 再訪 (三)」『関西学院大学社会学部紀要』110号 : 47-54.
- 高坂健次, 2011. 「相対的剥奪論 再訪 (四)」『関西学院大学社会学部紀要』111号 : 137-143.
- Merton, Robert K. and Alice S. Kitt, 1950. 'Contributions to the Theory of Reference Group Behavior,' in Merton, Robert K. and Paul F. Lazarsfeld (eds.) *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier,"* Pp. 40-105. The Free Press.
- Merton, Robert K. and Paul F. Lazarsfeld, 1950. *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier"*. The Free Press.
- Merton, Robert K., 1957. *Social Theory and Social Structure*, Revised and Enlarged Edition. The Free Press. マートン、(森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳)、1961. 『社会理論と社会構造』東京 : みすず書房.
- Stouffer, S. A., E. A. Suchman, L. C. Devinney, S. A. Star, and R. M. Williams, 1949. *The American Soldier, Volume I: Adjustment During Army Life*. Princeton University Press.
- アレクシス・ド・トクヴィル、1836=1998. 『旧体制と大革命』(小山 勉 訳) 筑摩書房.

The Theory of Relative Deprivation Revisited (5)

ABSTRACT

The present paper is the continuation of earlier articles by the author on the same topic. One of the steps to develop a theory of relative deprivation was taken by James A. Davis (1959), where he made a ‘formal-theoretic turn’ so as to explain the generation of relative deprivation with a formal definition of relative deprivation and a construction of a conceptual model assuming that actors compare themselves with others randomly. He also introduced explicitly the related concepts such as ‘relative gratification’ and a ‘feeling of unfairness,’ and on the other hand, ‘relative subordination/superordination’—and a ‘social distance’ by incorporating the ‘in-group’ and ‘out-group,’ and eventually ingeniously and successfully explained formally the ‘nine excerpts’ of episodes taken up earlier by Merton and Kitt (1950).

Key Words: relative deprivation, *The American Soldier*, reference group, missed opportunity